

松屋筆記

卷世

45
1397
14



門 15
號 1397
卷 14

Handwritten text in cursive script, possibly a title or chapter heading, located at the top of the page.

Handwritten text in cursive script, continuing the main body of the document.



Handwritten text in cursive script, continuing the main body of the document.

Large, bold, vertical characters in a stylized calligraphic font, possibly representing a name or a specific section title.

Handwritten text in cursive script, located at the bottom of the page.

高田早苗
昭和二十八年八月
寄

1. ...
 2. ...
 3. ...
 4. ...
 5. ...
 6. ...
 7. ...
 8. ...
 9. ...
 10. ...
 11. ...
 12. ...
 13. ...
 14. ...
 15. ...
 16. ...
 17. ...
 18. ...
 19. ...
 20. ...

杉屋筆記卷卅目錄

- ① 日ろきあらしんがうろ
- ② あつた
- ③ 武蔵の
- ④ ぶぶ
- ⑤ ぶぶ
- ⑥ ぶぶ
- ⑦ 物産補使并兵糧束
- ⑧ 川の
- ⑨ ぶぶ
- ⑩ ぶぶ

十 音名子果丸と云一樹
十一 常我物語にうし時人
十二 懐
十三 現在のとわかなをうしと名る

十四 如意寶珠

十五 家見

十六 爆竹

十七 急取俳諧

十八 舞

十九 鉄鉈象
二十 金毗羅神
二十一 犬追物
二十二 カドの石歌
二十三 傀儡の人歌
二十四 地獄とよと娯家とよ
二十五 みの草
二十六 髪置
二十七 茶店茶屋
二十八 塔の詩

廿六 亡二位。亡三位。敬位。
 廿五 權守
 廿四 中御
 廿三 位子殿と呼ばる
 廿二 三位以上の人の實名か
 廿一 林田城介三浦介
 廿 冠者
 十九 例

廿六 盲目女の歌
 廿五 聽道長者道。官符。
 廿四 勾當内侍并長橋局
 廿三 女官の訓々也
 廿二 勲位
 廿一 官位唐名の訓々也
 廿 宣旨書
 十九 一分召
 十八 外位并内
 十七 日比上

歴代波兵五十九卷の巻目と巻子の中は何れも冬に記され

下り二巻

杉屋筆地巻卅

杉屋 高田延清文儒稿

一 日ろをわたりてよるよる

俗言より日ろをわたりてよるよるといふと
あり江濃記世に道三ハニヤウギ腰
ヲカケ母衣ヲスリテ悦ヒケルと云え
武者の母衣を中り動テ悦ヒ喜悦ハ
るよるは日ろよりや

二 あつし

俗言よりを答つてアツハレと云り天

松浦肥前守
高田延清稿
名神二年七月
山浦延清稿

晴の字は武の来りし子アツハシハ
そそ手家物流るる衣もアツハシと
みたるを如扱とい天晴の字は古流
指差のよりたる物も天の晴るるとも
アツハシと云ふはつるはアツハシハ
貴流はまをい切たるアツハシ
と嗟嘆し讚貴はつる

三 武蔵の御田

手家物流るる衣もアツハシハ
武蔵の御田ハ郎所産とあり

御田ハ年恩田と云けり尾張の織田は
もは御田ハ神の御田と云る名はつる

四 流るる并流ると云

流るると射込流るると実込と云はれ
正しと云ふ流るる手家物流るる衣は
位者合戦の御田ハ射テ云々同
九の流るる御田ハ射テ云々
あつるると云ふ御田ハ射テ云々
月くると云

五 流るる水

遺雜二相換

此の如く云ふに、
先づ陸奥の
馬を、
次いで
青葉馬

と申すは、
此の如く、
中上巻
駒と云ふは、
又中下巻
段

今、
取留云々、
此の如く、
喜馬

後出の書
三丁の二巻
丸の二巻
丸の二巻
丸の二巻

書書箋あり
言海ありあり
子ありあり
人ありあり

二のよことあると早の二なりしと

⑩ 重なる二果丸と

重なる二果丸と
箱王丸と
藤大坊と
る下いア
池子命

⑪ 曾我物語

曾我物語
の者の比

人ありあり

二助成時
上申又とあり
著述
明こそん
常の利
あり古
本とい
い海
弘法
房も

曆内何日改内、房内之紙致と云
時予はさかたつていとも衣うつを思
てらつづき、時やまぬんと海見ると
至まらやえたらねらり、あまやて
りく、男之をさし、是序、時日、房内子
駒遊のあり

多岐のその清水子うたてて、今や
り、ん、今、日の駒と海は、龍ありや
り、下、時、文、は、こと、ら、き、あ、る、兼、早、や、然、
た、つ、つ、つ、ま、ま、ま、の、房、の、ま、ま、い、り、り、衣

らつづき、時やまぬん

如意寶珠

如意寶珠轉輪秘密現身成佛
金輪咒王經大興善寺三藏沙門
大德智不空奉詔譯如意寶
珠品第三云、尔時、在熱惱池、龍王、從
在熱惱池、銅輪龍宮、自出、湧出、詣我
迦年、尼佛、所、托、紫雲、下、禮、拜、世尊、奉
敬、供養、與、諸、眷屬、亦、研、言、世尊、唯
願、入、我、宮中、受、我、供養、今、時、也
尊、受、就、王、請、即、起、寶、座、入、就、王

宮云今時會中有一款女相好奇
妙猶如天女心意和雅如天喜星
名曰喜女云今時就王女即於佛前
以獨讚佛言云我者寶珠奉獻
世尊利益有情念樣法寶報謝
佛恩守護老教齊及一切念樣佛
果演說三乘利益一切今時就王女喜
女說斯偈已持一寶珠奉獻如來而
作是言唯願世尊受我寶珠是如
意寶珠即就淵底九重蒼海中

在水精寶蓮中又王隱秘諸款守
護寧敬尊身猶如帝秋甘露寶
瓶滿一切願若諸有情皆此寶珠
一切所作一切所求如意如願一切悉
地皆堪成就我今重法即輕寶財
故奉上世尊云併告說世言汝今欲
為守護正法獻上寶珠我受信心
淨白寶珠不受麗就寶珠云尔
時虛空藏菩薩摩訶薩地藏菩
薩摩訶訶薩各與五百寶部者房

俱從虛而起俱自佛言願佛演說
如意寶珠法在河之福有情貧窮
困苦在得福智吉祥晴妙在上大果
伴告二大士言若有眾生欲得
天中亂宮福壽隨意寶珠隨
大河闍黎先授灌頂法已既入佛
境界大道場已深心受授大金剛
志即身受持大三昧耶戒不犯威
儀為利有情守護正法故造作
寶珠復以十二種珠寶合成如意

寶珠所謂一者即佛舍利二者
黃金三者白銀四者沈香五者白檀
六者紫檀七者香杓八者桑沈九者
白心樹沈十者栴沈十一者真際
此中金銀造作團形為如意室
於其中納佛舍利三十二粒以
香味泥塗之寶器上造寶珠已
即以此赤色九條繫眾是卷祕
入十八重清淨梵筵一重表
九山八海加大鐵圍山最後梵筵

四宝色成第一鑽鐵色中間黃金
色赤白銀色一二八重悉皆封之莫
見非人小人乃至天魔既造作畢
安置道場辦備香華恭敬禮拜
拜必成大悉心地莫生疑念昼夜
懇懇修行念誦是為人間秘密
精進大如意珠玉更不亂宮珠寶
珠玉是為人中最上寶珠若無舍
利以金銀琉璃水精馬腦琥珀氣
寶等造作舍利珠如上所用行者

無力者即至大藥邊拾清淨砂石
即為舍利亦用藥草竹木根節
造為舍利其數三十二粒七粒為主大
如鷄子計即造寶珠其珠放光者
照一切貧窮困苦云云○六一山秘密
記云最極大秘密云云一山者是南海
第一之普陀聖教相應之勝地也凡
我朝大日如來還國之冥地故國名
大日本因此國中有一名山号少一
山山中有精進峰其上有一顆

之宝珠号大精進如意此鐵塔
流傳三國相承其宝也是大日如来
心肝諸佛菩薩通三昧耶形也宝
珠即大日徧照在身體數三昧總
伴也故國名大日本國也此宝珠
垂迹神道名天照大神故天照大
神天石扉開少一巖岨諸神同
等出宇多即云我朝大皇胎藏
東曼陀羅故實相日輪居此國故
名大日本國也就中此胎國亦用

理智西達九州表金剛号九會東
開八國表胎藏八葉中國達五畿
內是胎上大金上智兩部冥台秘
富故上畿內大和國為宗即宝生平
等凡聖大和為宗故是亦大日和光
徧照七道故此國有一郡名字多
郡宝生部福聚故云宇多此郡
中有一名山名少一山此山者宝生
名精進峰大所遺告云大唐大
阿闍梨耶所被付属不生如意

宝珠頂戴 後大日本國 義名山
勝地既畢 彼勝地者所謂精進峰
土心少師修行之地 東嶺而已矣
今宝珠安此山云 宝生山在兩部 諸
尊現居此山 祖皆住此山 守宝珠
故云宝生也 我相用闍如鷄卵是
為物立云云 此即指今宝珠即大
和右形為物 放生 本初故宝輪經說
宝珠云可大如鷄子許矣 且秘思之
云 今白一山寶珠 乃大精進如三意

珠云之文殊 濟喜提心 即秋迦舍利
秘尊 佛骨 即大日 體故 為法能生
本初故 乃寶珠也 日本用闍之本
源名云鷄卵 此指今寶珠也 云 今
寶珠 此大師相傳 兼和歲安置之
云 秘記云 精進峰 所在所也 以一
東嶺 北有龍池 中與三本 石塔有
之件 所寶珠 在處也 云云 秘意 宜
書云 極秘意 曰決云云 彼山有三 就穴 東
名妙 吉祥 就穴 西名 山 庚 吉祥

龍穴中先尾号持法
此持法若祥龍穴底入十丈有石
丈池在右有穴左穴長方此内有石
戶等云云長方此内有石戶廣三尺
厚二寸以為戶扉其左戶面有金
剛曼陀羅其右戶扉面胎藏曼
曼陀羅其裏有銘文弘法大印以
中爪書結云云天照大神等日本
大小神祇九萬七千七百餘神面面室
珠治名山守國家治國土云云 ○奥書 印

本云于時正平二年庚亥五月十八日
以小野信正所房所自筆本書寫
之云云金對資賴弘

⑤ 家見

家忠日記天正五年六月廿八日の事
信康家見之書 晴ノ城

⑥ 燔竹

曰天正五年五月の事ノ燔竹ノ事

⑦ 魚取御詣

曰年九廿二の事ノ魚取御詣

六 舞

日年十十六の多々子 东条 舞之 舞之 舞之

九 鏡鏡流

日年十の多々子 物之 鏡鏡流 世人 鏡の流

廿 金毗羅神

下部 華俱の 神道 大意 金毗羅神者 日本 三輪大明神也 傳教 大野 阿部 文載 之 多々子 金毗羅 三皇子の

己子 鹿嶋日記 之 神道 大意 龍光寺 雜錄 中之 載

廿一 犬追物

北原 信濃 所司 負 宗の 請 被 止 犬追 物 制 禁 狀 子 殊 被 犬追物 禁 制 之 法 德 尊 爲 歎 雖 知 政 化 之 仁 恕 人 猶 有 之 前 所 歎 武 藝 之 廢 絶 所 以 者 何 步 射 之 言 雖 非 無 且 其 德 騎 射 之 勤 猶 堪 律 其 敬 錄 焉 上 作 物 雜 在 其 數 當時 所 用 者 流 鏡 是 懸 也

上 卷 下 行 下 卷 下 行 高 忠 之 上 卷 下 行

流鑄馬笠懸面、雖大、
大進物者射、取之筒、要駝逐之妙術
也。是、以鐘倉右大お家、之所時、播磨之
入道お家、之所代、嘉祿年中、前武
州被、經評定者、興行、河津、

廿二 カドの列氣

竈をかてトといふケ、フリドコロの略し
ケ、フリの利も有き、フハカと云ひ、
もろも又、をり、カとといふ、トコロを
トといふ、の、り、あ、ま、る、ち、
何、多、

みい、ズドコロの、教、
づハカ、と、又、
い、
下ト、
嶋、
鬼、

廿三 傀儡の人形

傀儡、
平、
皇、

テ、
ニ、

海防テリノ坊
左近ノ人思地
三才高倉人
十卷四子
中精想五廿九
別子カテ始ス

後之今リ小人散遊とい別れ
和尙の狂言自下信保の詩二首あり
考もやしし上卷村下下卷

考飛起六廿
去故トアリ

今世信家の地獄とい稱あり
下卷得下路下昔有紅欄古洞西如

④ 地獄といふは信家といふ

地獄曰加也又安氣坊起口有西洞院諺
所謂山路也歌園之者過此知者皆為
以流傳事也今街坊之間十家曰信家
樓也云々といふ稱ありことなる

⑤ 狂言自下

狂言自下是狂言下冬夜焚火和州紀
州西園際山野荒漏

⑥ 狂言自下

同集下是狂言下石少用人向妙晴寺

三麻屋
三麻屋

宮付い大政官の廳より。の下文こ

② 勾當内侍。長橋局。

勾當内侍の侍の才一の人をりよ。
凡内侍司高侍二人。まじこも内侍のみみ
とよ。執柄の所娘やまある。典侍四人。
まじこも内侍のいげとよ。大中御言の
娘やまある。孝侍四人。まじこも内侍
のまじこもとよ。平家。良家。の目司なまの
娘まある。勾當内侍の孝侍の一觸し。
まじこも内侍とよ。呼ん。内侍のまじこも

とよ。勾當内侍今い長橋局と
り。内し取次役。後宮職負を
まじこも侍とよ。不得。孝侍。宣侍
とよ。まじこも。好せいとよ。禁秘抄。有
職問答。女房官品。やま考て。之し。

③ 女官の訓を

禁中上下の官名ある女官をいふよ。をん
とよ。刀自得。選の類。いみ。や。く。ん。と
り。て。や。や。り。有職問答。一。卷。七。丁
まじこも。

勳位

勳位の勳功より賜る位は文位
を勳位兼帯の人あり勳位をうけ
人あり軍功なき人あり勳位は賜るに
神の勳位を賜る武神を軍の序
所の教養よりよし勳一は別一
位は十二等あり官位令大内尚
書一の卷下あり

官位唐名

官位唐名は漢名より大の

字清^{スミ}とみ六^{シラ}の字リ^シとよきと有
職向^シ一の卷下あり

宣旨書

せん^トとみとみ^ト依^リありありせき
心^カ加^カ後^ノありあり有^ル職^トあり
の^キと^シと^シあり

一分召

一分召といふ国の史生を供^ルるよし
司の知^ル分^ル国の助^ル四分承^ル三分目^ル
二分史生に一分の定^ルし立^ル能^ル大内尚

答一の是

外位外位辭入内

外位より外姓を姓のしやる者
姓躬不知者子いぢ外位を授け
年の叙位子入内を内位子入内
大内向答一の是

世日比

日上とい禁申さし其日何子
朝家ニ祓行公事をも其日
公卿子し下知るると日上卿とい

敬位
通四
野

多しとせそ日比

此は二位と三位敬位

亡二位亡三位りり官とみ
位子對り官あり子亡位とい
位も又官ありて位をりり

早權守

国の權守に這後国司とし
よふ国司に正守を其国より
取行

即

叙爵の御領とよみ院宮や、振関な
と申依りて叙はるるとよ有職向
昔二の巻村了りて

④ 位殿の字を呼つてさる

位殿とよみ一位殿二位殿三位殿
の御領一 位をい大夫と呼わると
やうに位殿とよみ

⑤ 三位以上の人の實名はぬ

大内同卷二の巻は位三位より何
れも實名は他人の酬敵はさゆ

あまゝ、現在の人のさる故人まゝ
かゝる

④ 秋田城介三浦介

秋田城介い出羽国介い秋田城い高
清水園とも夾賊守徳の城をさし其知
る居位やさる 秋田城子居る介とよ
義をい秋田城介とより秋田いあは
とよい三浦介い相模介とよ三浦
まつあるさるい大内同卷二の巻

④ 冠者

爵をいへばを官はる者ハ冠者といふ
大内尚書ニの巻杖^杖をくも爵
と位の子^子と^と官治^{官治}於^於遠^遠の^の天竺^{天竺}等^等の^の人^人

○^例 杖^杖を^を書^書く^例

位^位の^の人^人

大内尚書ニの巻杖^杖子^子六位^{六位}子^子初^初也^也
書^書子^子七^七位^位也^也并^并同^同如^如後^後鳥^鳥羽^羽院^院の^の
時^時代^代子^子禁^禁制^制と^とし^し五^五位^位と^と被^被制^制し^して^て
同^同位^位以上^{以上}の人^人如^如姓^姓と^とさ^さす^す一^一く^く也^也

大内尚書ニの巻杖^杖子^子六位^{六位}子^子初^初也^也
書^書子^子七^七位^位也^也并^并同^同如^如後^後鳥^鳥羽^羽院^院の^の
時^時代^代子^子禁^禁制^制と^とし^し五^五位^位と^と被^被制^制し^して^て
同^同位^位以上^{以上}の人^人如^如姓^姓と^とさ^さす^す一^一く^く也^也

Handwritten text in a medieval script, possibly Gothic or similar, written in a single column within a rectangular border. The text is dense and appears to be a continuous passage. There are several red ink markings, including a small red cross at the top left of the page and a red dot above a word in the text. The text is written on aged, slightly yellowed paper.

